



TITLE:

ハザラ族の起源に関する諸問題 (羽田先生追悼號)

AUTHOR(S):

岩村, 忍

CITATION:

岩村, 忍. ハザラ族の起源に関する諸問題 (羽田先生追悼號). 東洋史研究
1955, 14(3): 200-214

ISSUE DATE:

1955-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/139049>

RIGHT:

ハザラ族の起源に關する諸問題

岩 村 忍

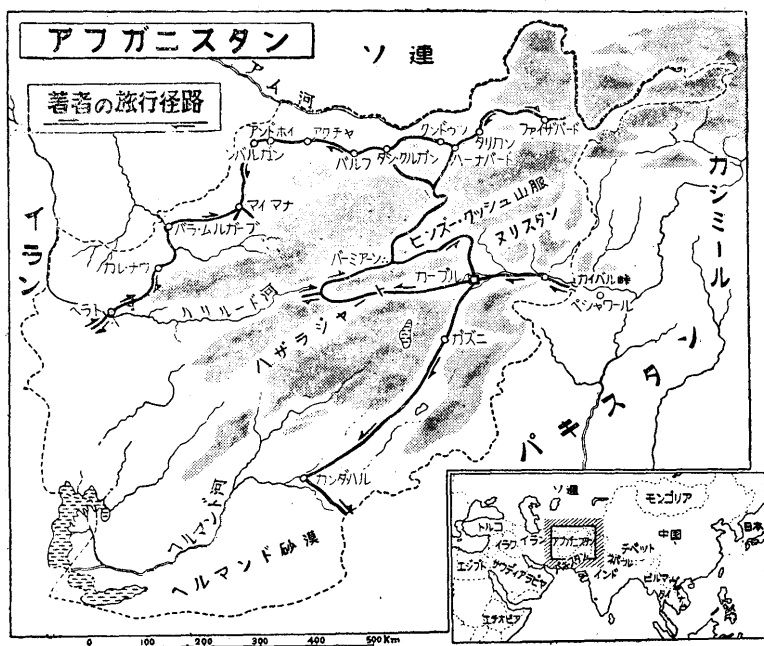
- 一、ハザラ族の起源についての説
- 二、ハザラジャートとはどんなところか
- 三、ハザラジャートの原住民とハザラの言葉
- 四、ハザラ族の生活

一、ハザラ族の起源についての説

アフガニスタンのハザラ族というなまえは、かなり古くから知られている。一番古く、ハザラ族についての記録をのこしているのは、確定的にはいえないが、しかしバーブル大帝のメモワールとかタリヒ・ラシディの中には、ハザラというなまえがしばしばでてくる。けれども、バーブル大帝でも、あるいはタリヒ・ラシディの著者、ミルザ・ムハメッド・ハイダール・ハーンでも、ハザラ族については、すこぶる簡単にしか記していない。しかも、メモワールや

タリヒ・ラシディをよくよむと、どうもこの二人も、ハザラ族についてよくはしっていなかったらしくおもわれる。

一體ハザラという名はどういう起源をもっているか。それについては、いろいろの人が殆んど一致した考えをしている。つまり、それはペルシア語の千をいみする「ハザール」からきている。パロポミサス山脈附近のいわゆる四つのアイマックの意味のチャール・アイマックの一つは、「ハザラ」といわすに、「ハザリ」といっている。ペルシア語では語尾に「i」がつくと、ある民族あるいはその民族の言葉という意味になる。たとえば蒙古語のことを「モゴリ」という。そのように「ハザリ」とは、千の人、あるいは千戸ということである。たゞし、ハザラ語は「ハザラギ」といっている。この「ハザール」ということは蒙古語の



◀ミンガン▶にあたり、すなわち千戸のことであろう。したがって、チュルク・モンゴル族のすんでいる中央アジアの各地に、◀ハザラ▶、◀ハザリ▶、◀ハザール▶などの地名はいくつかある。これは地名であるというよりは、むしろ種族名であるとおもわれる。地図では地名のようにでてくるが、そのあたりにすんでいる人々のはなしをきくと、むしろ種族名だという印象がふかい。

それでトルコ・モンゴル系の、とくにアフガニスタンでは、一三世紀のチンギス・ハーン、ならびにその後の蒙古人の侵入當時および侵入後、アフガニスタン守備のために、各地におかれた千戸の子孫が、ハザラといわれるようになった、そしてその住地がハザラジャートであるといわれる。したがってそれは、「ハザラ族のすむ場所」と理解されているのである。それでは、このような語源の解釋について、どうおもうのかと問われると、今のところ残念がらわなしには断案はない。

二、ハザラジャートはどんなところか

地図によって、ハザラジャートの大體を説明しよう。そ

のまえにアフガニスタンの地勢を簡単に説明すると、北はソ連に接し、東の方につきだしているワッヘン地方は、一部中國の新彊省に接している。東から南にかけては、パキスタンに連なり、西はイランに接して、完全に海から隔離された國である。その廣さは二四萬平方哩あまりで、すなわち日本の約一・七倍位である。人口は、いろいろの説があつて確定的なことはいえない。政府發表では、一、二〇〇萬となつており、各種の年鑑によれば、一、〇〇〇萬といわれている。わたしは、おそらくそれよりもっとすくないとおもう。大體八〇〇萬から一、〇〇〇萬位ではないかと考えられる。この土地は、ちやうど眞中をパミール高原に發するヒンズー・クシュ山脈が通つてゐる。ヒンズー・クシュ山脈は、東部はパミール高原にちかくなるほど高くなり、それから西にゆくほど低くなつてゐる。大體パミール高原にちかいバダクシャン、あるいはかつてのカーフイリスタン、いまのヌリスタンには、疑間の民族が住んでゐる。この地帯には、六、〇〇〇メートル位の山がある。西方のカーブル盆地を中心に、そこから西にゆくに従つてさらに低くなつてゐる。といつても、カーブル盆地は一、

六〇〇ないし一、七〇〇メートルあり、それから西はふたたび高くなつてゐる。こゝには、コーイ・ババ山系があり、高い山になると四、〇〇〇メートル以上、五、〇〇〇メートルもの高い山もある。

カーブル盆地から西をハザラジャートといい、それからさらに西方、レギスタンにちかいところをゴラットというが、これがモゴール人の原住地らしい。したがつて、ハザラジャートは、カーブル盆地とゴラットとの中間のヒンズー・クシュ山脈の中にある。

それではハザラ人はどんなところに住んでゐるかというところ、大體谷間に住み、この邊では海拔二、〇〇〇ないし三、三〇〇メートル位のところであつて、谷の兩側には、大體三、〇〇〇メートルないし四、〇〇〇メートルの高い山がそびえてゐる。この邊の雪線は、大體四、二〇〇メートルであるが、その下にも谷間にかんりの雪があり、その雪が春から夏にかけてとけて谷間に流れこむ。それで、その水が谷間を灌漑するので、それらの谷間は居住が可能になる。このようなところにハザラ人はすんでゐる。しかしこの谷は高い山と山との間にあるので、したがつてこの谷間と谷

間との連絡はとりにくい。谷から谷へ交通するのには、高い峠をこさないと連絡できない。それで一つ一つの谷が、かなり隔離された社會を形成している。そのような谷にハザラ族がすんでいる。

三、ハザラジャートの原住民とハザラの言葉

これにつけ加えてのべておきたいのは、ハザラジャートの原住民は、どんな民族であつたかということである。もちろんこれについては、文献は全くない。なにことも文献に基づいていうことはできない。しかし一九二六年に、ロシアの有名な植物學者バヴィロフが、アフガニスタンのひろい地域にわたつて探險をしたが、その報告によれば、ハザラジャートの東方、有名な大石佛のあるバミリアン附近の農業は、非常に原始的だといっている。それは農業の技術がそうであるとともに、小麦の非常に古い型がこの邊の谷間にみられるということである。それから考えると、ハザラジャートには、非常に古い時代から、ある種の民族が居住していたということとは、ほん想像できる。この原住民とはなんであるか。もちろんはっきりはわからない。

しかし大體インドのドラヴィダ族にちかい、色の黒い、背の低いバルバルとよばれる民族であらうといわれている。これはハザラ族と混血して、いまではその痕跡がさすがにハザラ族の中にみられる。わたしが觀察したところでは、ある部落では相當濃く混入していることが推測される。ハザラが原住民でないことははっきりしている。したがってハザラ族は、ある時期に、ハザラジャートに侵入してきたということになる。この點について、ハザラ族に關する文献として信憑性のあるバール大帝の備忘録や、タリヒ・ラシデイによると、それ以前からハザラ族はハザラジャートに住んでいたことは確かである。一六—一七世紀にはすでに、ハザラ族はハザラジャートに住みついていたとみなければならない。そうすると上限はいつか。この點が問題だが、それ以前の文献には現われない。蒙古侵入以前には、ハザラという名前は全然きかない。

文献をはなれて、今度の實態調査からみれば、ハザラ族は體質的にいって、蒙古系であることは疑いが無い。蒙古系民族が大舉してアフガニスタンに入つた最初の確實なもの、一三世紀のチングス・ハーンの蒙古人の侵入以前に

はない。しかしもう一つ異説がでる可能性がある。蒙古帝國崩壊後、チムールがアフガニスタンを征服した。それでチムール麾下のチュルク・モンゴル系の民族がハザラの先祖になったのではないかという疑いもありうる。とくにチムールの子、シャー・ルックは、御承知のようにヘラトを中心に勢力を振るったが、そのシャー・ルックの麾下の蒙古人がアフガニスタンにいつき、それがさらにウズベックやタジックやプシュト人が勢力をえたときに追ひ拂われて、もっとも條件の悪い山岳地帯に追ひ込まれたという異説もたてうる。しかし、この問題はちよつと考えてみるとすこしおかしいところがある。それは、もしもハザラ族が現在蒙古語を話しているいわゆるモゴールと關係があるとすると、そしてモゴールはある特殊な環境の下に蒙古語を保存したが、ハザラは完全に蒙古語を失ったと考えられるなら、それからもう一つ、ハザラの現在の生活状態、生活技術からいって、これが蒙古的なものも保存していると考えれば、この二つの假定を承認するなら、チムール並びにシャー・ルックの時代のチュルク・モンゴル系の征服者の部下がいついてハザラの先祖になったと考えるのはちよつと

おかしい。チムール、シャー・ルック、とくにこれらの部下の兵隊には、モンゴールの血はすくなく、チュルク系の血がむしろ多い。言葉もチュルク系の言葉、とくにチャグタイ・チュルクになっている。そうすれば、ハザラ族がチムール、シャー・ルックの時代のこの二人の征服者の軍人の子孫とするところちよつとおかしい。もう一つはタリヒ・ラシディの著者、ミユルザ・ハイダール・ハーンはチャガタイ語でタリヒ・ラシディをかいいたので、もしもハザラ族が、チムールやシャー・ルックの部下の子孫なら、それに直接關係のあったミルザ・ハイダール・ハーンがそれをしらぬとは考えにくいし、バブル帝が、ハザラは墮落した民族だといっているのもおかしい。両者は密接な血のつながりがあると想定されるからだ。どうも、現に蒙古語を話しているモゴール並びにハザラの起源に關して蓋然性の高い考えは、やはり一三世紀の蒙古軍人の子孫とみることでないかとおもう。そしてモゴールはある特殊な條件の下に蒙古語を保存したが、ハザラはそれを失ってペルシア語を採用することになった。こう考えるのが、いまのところ一番妥當なのではないかとおもう。

ハザラの言葉についてであるが、これはペルシア語である。しかし、特殊な語彙も入っている。ペルシア語ではあるが、語彙にはチュルク・モンゴル系のものがかかなり混っている。ヘラト地方で話されているペルシア語、またはカーブル地方で話されるペルシア語とは語彙において違うのである。この特殊な語彙については、人文科學研究所の二十五周年記念の紀要にかいてあるから参照願いたい。その中にはチュルク・モンゴル系の語彙がかかなりみられるようにおもう。モゴル族の蒙古語に入っているペルシア語の語彙の方が、ハザラ族のペルシア語に入っているチュルク・モンゴル系の語彙よりはるかに多いであろう。文法的構造では、ハザラ語は完全なペルシア語であることにすこしの疑いもない。

四、ハザラ族の生活

歴史的に見ればハザラ族をどう考えねばならないかということについてのわたしの考えをのべた。結論が先になつたが、それでは現在、ハザラ族はどういう生活をしているか。蒙古的な何かが残っているかということについて簡單

にのべたい。

第一にのべたいことは社會組織である。ハザラ族は一九世紀まではヒンズー・クシシュ西部地方で獨立を保っていたが、一九世紀から二〇世紀のはじめにかけて、プシュト人の勢力が強くなって、アフガニスタン全土を統一した。その時ハザラ人も、プシュト人の武力によって、カーブルの中央政府の支配下に入った。わたしが滞在、調査したアシュタルライにはミール・ハイダル・ベックという豪族がいて、かれはその邊一帯に勢力を振っていた。かれは同時に Δ アルバーブ Ψ という役名をもっている。 Δ ミール Ψ という稱でもわかるように、かつてこの男は Δ アミール Ψ であつたわけで、それがプシュト族によるアフガン統一以後、ハザラジャートの封建制が廢止されてアルバーブという稱號をもつことになつたにすぎない。ところが、 Δ アルバーブ Ψ という稱は縣長というようなものであるが、實は一文も政府から俸給をもらつてはいない。これはプシュト人がハザラジャートを征服した時、ちょうど日本の明治維新のように、ハザラジャートの封建制を溫存し、明治維新政府が舊大名を縣令に任命したように、ハザラ人の獨立時代の

領主をそのまゝアルバーブに任命したものらしい。

この連中はかつてハザラ族の獨立時代の領主的豪族であるから、非常におゝきな土地と人民とをもっている。それについて、中央政府は豪族を利用してそのまゝハザラ人を間接に統治するようになったのではないかと推測される。ハイダル・ベックの例をみると、かれの一族だけで數百戸あって、わたしの滞在したかれの家のあるアシタルライ峡谷の土地の大半をもっている。その點からみても、またミール・ハイダル・ベックの一般農民にたいする態度、反對に一般農民のかれにたいする態度からみても、領主とその支配下の一般人民という關係がいたるところにあらわれている。一例をのべるとわたしの滞在當時にかなり重大な傷害事件がおきた。喧嘩で頭を割ったというのである。殺したのか、重傷かはわからなかったが、ハイダル・ベックは早速息子をさしむけ、犯人を逮捕して、ハイダル・ベックが判決を下した。加害者は牛三頭を被害者に支拂えというのである。こういう點からみると、ある種の裁判權も行使しているらしい。しかもこの裁判權を行使しているミール・ハイダル・ベックは、政府からは、一文もアルバーブ

としての報酬をもらっていないのである。これは餘談になるが、ある種の人命賠償や傷害にたいする賠償金、すなわち中世ヨーロッパにおけるゲルマン民族の間にあったウェアギルドあるいはブッセというような賠償制度がハザラ族の中に残っているようである。蒙古民族の間に人命賠償、傷害賠償が行われたことはたしかで、これについてはかつてわたしが「東洋史研究」誌上で「元朝の法制における人命賠償」(「東洋史研究」十二—四)という論文をかいておいた。参照ねがいたい。とにかく元代の蒙古人の間に行われていたものにちかいものが、ハザラ族の中に残っていることも非常に興味ある點である。こういうことが現在も行われているという事實から、ハザラジャートにおける封建遺制もある程度推測されうると考えられる。

この邊は大體内婚制である。勿論時にはプシト族やタジック族と通婚することもあるが、原則としては大體ハザラ族は内婚制をとっている。又、ハザラ族内の各部族、たとえばダウラト・ベックとかハイダル・ベックとか、ハザラならハザラの中でも内婚制の傾向がみられる。

それからアシタルライの滞在をおえて北へむかった。

勿論處々でヘザラ人の社會を訪問して歩いたが、それから山をこえてバーミーンにいったのである。その途中にヤクワンというヘザラ族の土地がある。かなり大きなヘザラ族の集團で、五〇〇―六〇〇戸ある。これを支配している大豪族の所に二、三日とまった。この土地の豪族は冬から春さきの間は谷間（二、六〇〇メートル）で生活する。

夏暑くなると、虫が殖え家畜が弱るといので、畑に少數の番人をおいて、村民全部を率い三、三〇〇メートルの高所にあがる。これは地理學という *transhumance* の現象である。これを規則的に毎年くりかえす。こういう現象はアシュタルイではみられなかった。ヤクワンでその豪族といろいろ話している時に、かれは「わたしはわたしの財産相続人に一番末子を指定したのだ」という。アシュタルイのヘザラ族の中では、イスラムのシャリアート法によって均分相続を實行している（時には例外もあるが）。相続問題はモラーが裁判するので、かれは必ず均分しろという命令をする。それでもかく表面的にはアシュタルイのヘザラ族の間では均分相続になっているが、ヤクワンでは末子相続が残っている。それで「そういう制度か」と

きくと、「いや親はいかなる子供でも一番氣に入ったものを相続者に任ずることができる。末子が一番氣に入ったからしただけだ。しかしそういう例はほかにもある。自分の父もこういうことをした」というのである。とすると、どうも末子相続の痕跡が、このヘザラ族の間に残っているとおもわれ、これも面白いことだ。

アシュタルイのミール・ハイダル・ベックは谷底に非常に大きな、まるで城か砦のような家をもっており、數人の妻と數人の召使に圍まれて生活をしている。これには銃眼もあり、見張臺もある。夏になると谷底は暑いので、もう少し高い所に、冬の家よりすこし小さいが、夏の家もっている。夏はそこで生活をする。わたしが滞在中、身の廻りの世話をしてくれたヘザラの召使があつたが、この召使に種々きいてみた。かれは始めはわたしと同じ年齢かとおもつたが、よくきいてみると四〇歳前だといっていた。わたしが「一體お前さん、奥さんは何人もっているのか」ときくと、「四人もっている」と答えた。その四人のうち、二人は自分で娶つたという。自分で娶つたという意味は、お嫁さんをもらう時にはその兩親に聘金 (*bride price*)

をださねばならぬが、二人の妻君をもらった時には自分で拂ったということであり、後の二人は主人のミール・ハイダル・ベックがもらってくれた、すなわち、ミール・ハイダル・ベックが聘金を拂ってくれたという意味である。それからまた「何時からミール・ハイダル・ベックの下に奉公しているか」ときくと、「いや親代々先祖から召使としてハイダル・ベックの所に住みこんでいるのだ」という。召使にきいてみると、ハイダル・ベックは十何人の男女の召使と數十戸の小作人をもっている。そしてかれの家の召使のうちの少數の者は小作戸の若い者だが、大部分はハイダル・ベックに隨身している世襲の召使である。そうするとハイダル・ベックのような豪族の召使は雇傭關係ではなく、身分的な、世襲的な召使であるように觀察された。その後、そういうことを確める材料がないかと探してみる、あった。ある時、ハイラト・イマームハ（ケルベラの敗戦を悼む祭）というシア派の盛大な祭があった。運よくそれにぶつかったが、その時ハイダル・ベックの夏の家にぞくぞく人がおしかける。目の子算で五〇〇人以上の（これには女はこないが）男がやってくる。そしてハイダ

ル・ベックの庭にならぶ。まず所謂、サイド（豫言者マホメットの血統）がたった。ハザラ族のサイドというのはおかしい。ハザラ族とアラビア人とはなんの關係もないのだが、ハザラ族の間にもサイドと稱する者がある。そのサイドがたって演説し、皆ワーワーと泣き、宗教的エクスタシーにはいる。それから、アホン（ahund）がたつ。このアホンというのは非常に面白い。わたしは内蒙古の回教徒の調査をやったことがあるが、中國の回教では清真寺の指導者をアホンという。これがどうもわからなかった。何故アホンというのか疑問におもった。ところがハザラジャートにきてみると、ハザラのシア派の宗教的指導者はアホンなので、これで蒙古の調査におけるわたしの疑問は一舉に解決した。このアホンがたって説教をした。説教がすむと食事になる。この食事はミール・ハイダル・ベックが全部負擔した。きいてみると、牛三頭を屠ったというのである。牛三頭というとは日本でも相當な金だが、ハザラジャートのような貧窮化した社會においては大變な金である。聘金でも低いのは羊五頭といわれ、これから考えても牛三頭は相當な交換價值である。この牛三頭とその外に種々な

ものを、五〇〇人にちかい小作人やその他の人々に饗應するのであり、サイドおよびお説教をしたアホンには五〇〇アフガニを拂う。一アフガニはドルを通じて日本の一〇圓に當るから五千圓、わずか三〇〇四〇分の説教にたいして五千圓づつ一萬圓拂う。これだけの大金を投じて自分の小作人その他に饗應する。その食事のとき、家の中で食事をする（イスラムの掟にしたがって女を他人にみせないから、自分の本屋の中には他人は一切入れない。わたしは別棟の客室にいたのだが、その客室に入った）。それをみると、サイドならびにアホンそれからハイダル・ベックの一族がならび、その家屋のすぐそとに一寸したヴェランダがあり、そこにならんだのが小地主、自作農、それから面白いことには鍛冶屋、靴職人、仕立屋といった種類のいわゆる職人が第二段にあり、第三段は小作人で頭数の殆んど大部分である。こゝでちょっと面白いのはこれらの職人階級が第二の階級を構成していることで、すなわちヘザラジャートにおける職人の社會的地位は地主、豪族につぐもので、代々世襲である。また大工がきてミール・ハイダル・ベックの家の修理をしていた。この男は非常にユーモラス

な男で、きくと、自分は大工じゃないという。大工は家をこしらえるのだが、この邊の家は泥でつくるので専門の技術を必要としない。しろうとでもできる。たゞ窓とドアをつくるのがむづかしい。それをつくる指物師だといった。これも大體世襲で、大工の子は大工に、指物師の子は指物師になる。時には指物師の子が鍛冶屋になり、アホンの子が大工になることはあるらしいが、大體固定した小地主で、自分自身がわずかの小作人をもって、あまり大きくない土地を耕し、さらに自分自身では靴職人、指物師、鍛冶屋などをやっている。第三の階級は小作人といっても農奴に近い小作人である。もう一つ面白いことをいうと、その指物師との話の中に「ダログ」という言葉がでてきた。ダログというのは日本の隣組長のようなもので、數戸あるいは十數戸のヘザラの集團の中で、割合に金持な者が選舉によって選ばれ、アルバープによって承認されると、これが人民とアルバープ、更にパンジャオにあるヘザラジャートの政廳、更にカールにある中央政府とのつながりになるようである。一種の民間から選舉された役人なのである。これは疑いもなく、蒙古時代のダルガチの變化したものにちが

いないので、かえって調べてみると、ペルシアの一部と西トルキスタンにもダログという制度があり、これは村長のような役だとのことで、それでハザラジャートにおいても村長のような役をダログといっている。これもハザラ族の起源を考えるうえに、あるサジェッションをあたえる事實ではないかとおもう。

(一九五五、一、二八)

以上は、東洋史談話會例會で發表された、岩村忍教授の講演である。つぎにその講演につづいて、かなりの長時間にわたる質疑應答がなされた。それでは、講演では十分にふれえなかった問題、とくにハザラ族の社會・經濟・政治などについてふれられているので、つけ加えておく。以上の講演と質疑應答についての文責は池田誠にある。

問 經濟生活について。

答 山羊は大體蒙古と同じように、何十頭かの羊の中に何頭かの山羊がはいっている。大體、家畜の世話は子供の義務であつて、夜があけると同時に、子供は羊や山羊をつれて山へ草や柴をかりにゆく。その間、大人は畑の世話をしている。面白いとおもうのは、蒙古ではみられない皮袋がこゝでは非常に大きな役割を演じている。皮袋はペルシア語で「マシユク」^۷という言葉を使っている。これは羊の手

足をきり離し、中の臟腑を全部しぼりだし、手足のきったところを縛つてその中に羊あるいは牛の乳をいれ、それを醗酵させてヨーグルトを作り、バターを作り、チーズを作る。ただし酒を作ることはしない。蒙古には馬乳酒があるといわれていたが、梅棹忠夫君などの研究した結果によると、蒙古では馬乳酒は作らないという。これはわたしも、同じ考えである。すくなくとも現在の蒙古では、馬乳酒というものは作らない。しかもそのうゑ現在の蒙古では皮袋も使わない。ところが一三世紀前後の蒙古では馬乳酒を作るために（あるいはヨーグルトも同様とおもうが）、皮袋を使ったことは明瞭であつて、たしかルブリュックかカルピニに、皮袋の中に馬乳をいれ、鞭でたたいて振動させてクミーズを作るとかいてある。現在の内蒙古ではこういう皮袋を使うことはない。現在の内蒙古では皮袋を使う習慣は全く亡びてしまっている。ところがアフガニスタンのハザラ族の間では、いまでも皮袋でヨーグルトを作っている。その意味で蒙古的な古い形をのこしているという想像もできるのである。たゞ酒はイスラムの戒律によつて禁止されているから乳酒にはしない。

經濟生活は非常に貧窮で、耕地も限られているから、それに對應した人口の調整を、どういふ風にしているかはしない。間引のようなことが行われているのではないかと想像される。それでも餘った人口はカーブルとか、ヘラトとか、遠くはパキスタンまで出稼人として行くのである。

一つ一つの谷は殆んど自給自足である。この小作人達は土地も地主のものであり、家も地主のものであり、飼っている家畜も地主のものであり、農具も地主のものであり、全部が地主のものである。結局、身體一つしかない。その他は殆どなにもっていない。法的には自由を拘束されていないとおもふが、しかしもし地主に解雇されたらゆくところもないし、身體一つだから食うことはできない。働きにカーブルやヘラトへゆくとしても、ゆく間のことをどうするか。どちらへゆくにも數百料ある。だから結局自由民ではあるけれども、經濟上實際には拘束された不自由民だとしてさしつかえない。その他、社會的な拘束がなんらかの形で存在しているのではないかとおもわれる。わたしはそれを確かめるのに充分な期間滞在しなかったたので、なんともいえない。自給の程度は、冬の着物は一家の女、とく

におばあさんが、羊や山羊の毛から織る。またマッチは豪族が金持しか使わず、一般の人は火打石である。マッチなど買おうとおもっても、商店というものはなく、トルキスタンのようにバザールもなく、なかなか買えない。どうするかというと、年二回、春のはじめと夏のおわりにかけて、巡回商人がカーブルないしヘラトから馬に商品を積んでやってくる。その商品は、綿布、糸、針、タバコ、茶、砂糖等である。それも一般農民にはとても買えない。

巡回商人がミール・ハイダル・ベックの處に泊って商賣しているのをみたが、半分ぐらいは紙幣で賣買するが、あとの半分は物々交換である。たとえばこの綿布一米位をくれという、それについて▲ローガン▼（これは羊の尻尾からとる油である）をいくらいくらもってこいと商人の方で指定する。全く一方的な商賣である。あくるひある小作人のところへいった時、「巡回商人がミール・ハイダル・ベックのところへきているのをしているか」ときくと、「しっている」「じやなにか買いにいったか」というと、憂鬱な顔をして黙っている。これは物をかうだけの金などないということである。金というものは殆んどもっていない。二〇

年ぐらい前までは夏の着物も自給していた、そうであるが、いまは夏の着物は農産物とか、あるいは冬の間に織った羊と山羊の毛の敷物を賣って得た現金で買う。小作料は殆んど物納であるが、その餘りで綿布を買うそうである。その他は茶も砂糖もなにもない。マッチは勿論使わないし、煙草などももない。お茶は勿論贅澤品、砂糖などは薬のようなものである。だから殆んど賣買ということはなく、村が自給自足というのではなく、一軒一軒の農民が自給自足なのである。家を建てるのも自分で、近所の應援をえて、土で家をつくる。夜は日が暮れると同時にねるのだから、夜の生活というものは全然ない。必要がある時は、皿に羊の尻尾からとったハローガンツをいれて、そこへ燈芯をつけて光をとす。しかしこれはむしろ例外で、日がくれたら晝の生活は終るのだから、燈は必要としない。その他に鍋等をもっているものもあるが、またぬ者は石を焼いてその石のうえに大麥と豆の粉をねったものを流すと、中國の焼餅の薄いようなものができる。他には、ハイダル・ベックから預っている羊や山羊の乳でこしらえたヨーグルトをのんでいる。その他にはいるものはないわけである。生活と

いうものは最後までおしつめれば、いかに單純にできるかということに驚いたわけであるが、あれ程單純な生活は、蒙古でも中國の農村でもみたことはない。

問 村民も召使とミール・ハイダル・ベックとの關係と同じものではないか。

答 かつては召使も村民も同じくミールの輩下であつたのではないかとおもう。封建的な農奴というか、いまは召使と小作人とはわかれたが、もとは同じだったのでないか。かつては封建社會であつて、ミールがその領主だったのでないかとおもう。

問 豪族の住宅に銃眼があるということであるが、一々、武裝しているのか。

答 召使はすくなくとも五、六家族から十家族位豪族の家に同居している。いざというときには、おそらく農民が防備にあつたのだとおもう。壁は非常にあつく、銃眼があり、望樓がある。アブドゥル・ラーマンによる統一の時、このような城寨は全部壊されてしまった。それから又、ハザラがおとなしくなつたので禁令がゆるみ、又、城寨をこしらえているが、もう銃眼や望樓はこしらえていない。

問 ハザラ族同志で戦ったこともあるか。

答 昔はハザラ同志で戦ったらしい。しかし一番最近の戦は、プシュト人のアフガニスタン統一戦争で、その時はハザラ族は敢闘した。

問 ハザラというのは部族名であるか。

答 ハザラは推定人口四〇五〇萬とおもうが、かれらはハザラと自稱している。

問 クランはあるか。

答 クランはある。ダイクンディだけで五つ六つあり、最も有力な一つが先程のハイダル・ベックである。クランの名もハイダル・ベックである。現在の族長もミール・ハイダル・ベックといっている。その他にはダウラト・ベックというものが(ダウラトというのは金持という意味である)ハイダル・ベックにつぐ者である。兩者の間は親戚關係である。

問 もうすこし蒙古的な名はないか。

答 人名にはあまり蒙古的なものはない。ほとんどイスラム化している。蒙古的なものは名前にはなくて、むしろ日常用語の中に残っているとおもわれる。

問 酒をのまないということだったが、しかしシアだったらのむ者が多いのではないか。

答 それはアフガニスタンでは嚴重に禁じられている。ハザラはシア派で、そのことが内亂の原因の一つであったが、これが武力で鎮壓されたのであろう。それ以後はすくなくとも表面上は、酒をのませないという趣旨が國中に徹底しているようである。トルキスタンでも酒はのませない。ハザラジャートではブドウはとれないからブドウ酒は駄目だが、羊や山羊や牛の乳から作る酒はおそらく作っているかとおもわれる。金持、ハイダル・ベックなどは作っているかもしれないが、しかしあの大きな邸の中に、外來者は絶対に入れないのだから、みることはできない。

問 小作料は現物だとのことだが、小麥が主であるか。

答 小麥はむしろすくなく、大麥とか豆とかが多い。

問 率はどのくらいか。

答 ほぼ四割から五割が小作料である。

問 農具を豪族からもらっていて、そのくらいなのか。

答 その他に税金をとられる。四割から五割の小作料というものも、その中に來年の種子がはいっていないから、非

常に大きなものである。のこるのは半分で、その中から税金に少くとも二―三割とられ、來年の種子をのこさねばならないから、農民の取分はおそらく收穫の二割をこえないとおもう。

問 織物等はださなくてもいいのか。

答 家畜そのものがハイダル・ベックのものであるから、もちろん織物の一部もださなければならぬ。小作人は身體以外はなにももっていない。だから中世的な農奴にちか。法的には束縛されていないが、實際上、にげだせば食うことができないから死ぬよりほかはない。不自由民と同じである。

問 法律上、慣習上、にげだしてはいけないという制度を作る必要はないのか。

答 昔はおそらくあったとおもわれる。しかしカーブル政府に統一されてからは、そういうことはないとおもわれる。

ハイダル・ベックは、政府からアルバードという名だけもらっているが、俸給は一文ももらっていない。そして、裁判もやり、徴集もやる。徴兵を逃れたいとおもえば、ハイダル・ベックに懇願するよりほかはないのである。

問 豪族には身分的な地位があるか。

答 ある。小作人だけでなく、經濟的に獨立している小地主や自作農でも、なにかことがある時は、ハイダル・ベックのいうことは、なんでもきかなければならない、といていた。この関係はいろいろ試みてみたが、どうもはっきりわからない。主従的關係にあたるものではないかとおもわれる。だからお祭等には、そんな者はみなやってくる。だから固定的身分關係以外では説明できない。ハイダル・ベックは封建的な權威をもち、小地主などはその邸黨というようなものかとおもう。そして小作人は農奴的なものだろう、と考えられる。

Problems on the Origin of the Hazara Tribes

Shinobu Iwamura

The present article is a shorthanded version of the author's lecture delivered at a meeting of The Society of Oriental Researches, Kyoto, in January, 1955. The author made extensive trips in Afghanistan in 1954, in the course of which he visited the mountainous home of the Hazara in the central Hindukush where he spent some time among this hitherto little known people. The author introduces the generally accepted view on their origin, i. e., the Mongol origin, and proceeds to describe the landscape of the Hazarajat. Next he refers briefly to the Hazaragi or the language of the Hazara and to the supposedly aboriginal people, the Barbars. The author's own observations of the life of the Hazaras are also mentioned, and he seems to entertain the view that, regardless of their origin (nomadic Mongols or others), their life is largely agricultural, while their social relations feudalistic. There is appended a summary of the discussion which took place after his lecture. In this we find various vestiges of the feudalistic system.